

研 究

仕事をもつ母親の子どもの急病時における 認知的評価に関連する要因

林 由紀¹⁾, 山口 桂子²⁾, 服部 淳子³⁾

〔論文要旨〕

仕事をもつ母親の子どもの急病時における認知的評価に対する、家庭—仕事役割間の関係性を示すスピルオーバー、ソーシャル・サポート、子どもの急病に対する備えとの関連を検討するため、保育園児の母親1,489名を対象に質問紙調査を実施した（回収率64.1%）。認知的評価の4下位尺度得点を従属変数とした重回帰分析の結果、ストレスマネジメントに関わる「脅威性の評価」および「コントロール可能性」において、「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー」、「ポジティブ・スピルオーバー」、「職場理解」などが有意な変数として抽出された。母親を取り巻く環境因子に働きかけることによって、子どもの急病を脅威と捉えず、落ち着いて行動できるようになるなど、対処行動の改善につながる可能性が示唆された。

Key words：認知的評価，スピルオーバー，ソーシャル・サポート，働く母親，子どもの急病

I. はじめに

近年、女性の社会進出により育児期女性の労働力が上昇傾向にある。しかし、家庭における家事・育児時間には依然として夫婦間で大きな隔たりがあり、しかも夫が家事・育児に割く時間は、妻が就労しているか否かにかかわらずほぼ一定であることが明らかにされている¹⁾。このため、仕事と子育ての両立に伴う母親の負担は大きく^{2,3)}、仕事をもつ母親は役割過重の状況に陥っている可能性が高い。中でも働く母親が再就職後に最も苦勞したことは、子どもの急病などへの対応であることが指摘されている⁴⁾。そのうえ、保育園などでの集団生活を始めて間もない子どもは体調を崩しやすく⁵⁻⁷⁾、母親にとって子どもの急な病気は仕事を継続していくうえでの支障ともなりかねない。

このような家事・育児や仕事などの母親の多重役割に主眼を置いた概念の一つに、仕事役割と家庭役

割の間の関係認知であるスピルオーバーがある⁸⁾。スピルオーバーは仕事役割から家庭役割、家庭役割から仕事役割の双方向性を持ち、どちらの方向性においても、役割間のネガティブな関係を想定したネガティブ・スピルオーバーと、ポジティブな関係を想定したポジティブ・スピルオーバーがある。仕事の負荷や労働時間の増加によって生じた仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーの増大が、夫婦間の意見の不一致および子育てストレスの増大につながり、抑うつ傾向が強くなることが明らかにされている^{9,10)}。このような家庭—仕事役割間のバランスは、通常の生活ではなんとか保たれていても、乳幼児を預けて働く母親の場合、子どもが予期せぬ病気になる可能性があり、子どもの世話や仕事への影響などによって、ネガティブ・スピルオーバーが発生しやすい状況にあるものと懸念される。このように、仕事から家庭または家庭から仕事へのネガティブ・

Factors Related to the Cognitive Appraisal of Working Mothers Regarding Children's Sudden Illnesses

[2779]

Yuki HAYASHI, Keiko YAMAGUCHI, Junko HATTORI

受付 15.10. 9

1) 独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院（家族支援専門看護師）

採用 16.10. 8

2) 日本福祉大学看護学部（研究職）

3) 愛知県立大学看護学部（研究職）

スピルオーバーは、働く母親にとって重大な要因であると捉えることができる。

一方、Lazarus ら¹¹⁾によれば、特定のストレス状況において表出されるストレス反応の個人差には、ストレスラーをどのように捉えるかという個人の認知的な過程（認知的評価）が強い影響を及ぼしていることが強調されている。ストレスマネジメントにおいては、ストレス状況における脅威性の評価を軽減し、コントロール可能性を向上させることが重要とされている¹²⁾。Lazarus ら¹¹⁾はライフイベントよりもむしろ、日常誰もが頻繁に経験するごく些細な出来事（daily hassles）の積み重ねの方が、心身の健康状態に反映することを明らかにしている。家庭や仕事の中でさまざまな役割を担う母親を取り巻く状況を、この日常苛立ち事の多い環境と捉えるならば、子育てに対する余裕がない母親が子どもの病気に遭遇すると、脅威性が高く、コントロール可能性の低い認知的評価を下す恐れがある。このように、働く母親にとって子どもの急病は一種のストレスラーと捉えることができ、母親がこのような認知的評価を下す背景には、さまざまな要因が関連しているのではないかと考えた。小児では受診後の判断で90%以上が軽症とされており、平成14年度厚生労働科研 衛藤班の調査では、時間外一次救急診療の受診行動が24時間365日化していることが指摘されている¹³⁾。子どもの急病を脅威と捉えず、落ち着いて行動することができれば、こうした不適切な受診行動の回避につながるのではないだろうか。

そこで本稿では、仕事をもつ母親の子どもの急病時における認知的評価について、母親のスピルオーバーとの関連を明らかにする。さらには、母親を取り巻くその他環境要因からも検討し、子どもの急病時の認知的評価に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象

A 市内の認可保育園に通う0～6歳の子どもをもち仕事に従事する母親（母子世帯を除く）1,489名。

2. 調査期間

平成25年2～3月。

3. 調査方法

設置責任者であるA市行政部門の責任者および対

象施設となる保育園の園長の承諾が得られた13施設において研究を実施した。配布方法は、研究者が調査票を施設に持参し、対象者にはクラス担当者から母親への配布を依頼した。同一施設に子どもが複数在籍している家庭には、最年少の子どもを通じての配布を依頼した。調査対象者に対しては、研究の主旨、回答の自由、統計的処理によるプライバシーの保護等について文書で説明した。回答済み調査票は、無記名・厳封のうえ園内に設置した回収箱への投函を依頼した。

4. 調査内容

i. 対象の概要

母親の年齢、子どもの数、最終学歴、勤務の実態（勤務形態、勤務時間、残業時間）、仕事満足度（「5：大変満足」～「1：不満足」まで5段階評定）、子どもの在籍クラス（乳児組＝1、幼児組＝2）、出生順位（第1子＝1、第1子以外＝2）、1年間の子どもの欠席日数について質問した。

ii. 仕事役割と家庭役割間のスピルオーバーの測定

仕事役割と家庭役割間の関係を測定する福丸のスピルオーバー尺度⁸⁾を使用した。これは、「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー」、「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー」、「両役割間のポジティブ・スピルオーバー」の18項目から構成され、5段階（「5：そのとおりである」～「1：ちがう」）で評定を求める尺度である。得点が高いほど、それぞれのスピルオーバーが高いことを示す。

iii. 子どもの急病時における母親の認知的評価の測定

認知的評価の測定には、鈴木らの認知的評価尺度（Cognitive Appraisal Rating Scale；CARS）¹²⁾を使用した。CARSは、「コミットメント」（「この状況をなんとか改善したいと思う」、「この状況を改善するために一生懸命努力しようと思う」）、「影響性の評価」（「この状況は私自身に影響を与えるものだと思う」、「この状況は私にとって重要なことだと思う」）、「脅威性の評価」（「この状況は私を危機に陥れるものだと思う」、「この状況は私自身の生活を脅かすものだと思う」）、「コントロール可能性」（「この状況に対してどのように対処したらよいかわかっている」、「平静な気持ちをすぐ取り戻すことができると思う」）の4要因、計8項目、4件法（「3：まったくそう思う」～「0：そう思わない」）で回答を求める尺度である。各下位尺

度は得点が高いほど、それぞれの認知的評価が高いことを示す。この尺度は複数のストレス場面において、一貫した因子構造を持つことが確認されており¹²⁾、認知的評価の対象となる状況を調査者が設定することができる。今回は、仕事と家庭を両立するうえでの困難な状況として、子どもの急病発生時の場面を想定し回答を求めた。

iv. 病気に対する備え

子どもの病気に対する備えや日頃の体調把握の現状および母親の意識を問うための質問項目を作成した。

- (1) 入園前からの子どもの病気に対する備えについて、6項目から成る質問に対して4段階（「4：あてはまる」～「1：あてはまらない」）で評定を求めた。
- (2) 日頃の体調管理について、6項目から成る質問に対して4段階（「4：気にかけている」～「1：気にかけていない」）で回答を求めた。
- (3) 小児救急に関する電話相談に対する認知と利用経験について、4段階（「4：利用している」～「1：知らない」）で評定を求めた。

v. ソーシャル・サポート

子どもの急病時の保育園へのお迎えや欠勤が必要な場合の職場理解度、代理保育者の有無、子どもと家族へのソーシャル・サポートに関する質問項目を設定した。

- (1) 子どもの急病時に職場の理解がないと感じるか、5段階（「5：そう思う」～「1：そう思わない」）で回答を求めた。
- (2) 母親に対する夫の情緒的サポートについて、5段階（「5：そのとおり」～「1：ちがう」）で回答を求めた。
- (3) 子どもの急病時のサポートとして、育児相談者、代理保育者の有無について尋ねた。

5. 分析方法

子どもの急病時における母親の認知的評価に関連する要因について検討するため、認知的評価の4下位尺度を従属変数に、対象者の概要、仕事役割と家庭役割のスピルオーバー、子どもの病気に対する備え、職場理解、母親へのサポートを独立変数として重回帰分析を行った。最終学歴（4年制大学＝4、短期大学＝3、高等学校＝2、その他＝1）、勤務形態（常勤＝5、自営業＝4、パート＝3、内職＝2、その他＝1）、子どもの在籍クラス（乳児組＝1、幼児組＝2）、出

生順位（第1子＝1、第1子以外＝2）のように各選択肢について数値データを投入した。「仕事満足度」、「体調管理」、「病気に対する備え」、「電話相談」、「職場理解」、「夫の情緒的サポート」については、平均±1SD以内を「中群＝2」、それ以上を「高群＝3」、それ以下を「低群＝1」とする3群に分け、「育児相談者（あり＝2、なし＝1）」、「代理保育者（あり＝2、なし＝1）」、「出生順位（第1子＝1、第1子以外＝2）」は2群に分けて量的変数に置き換えて投入した。分析に先立ち、母親の認知的評価の4下位尺度得点と独立変数との相関を確認し、有意な相関が認められなかった変数を分析から除外した。多重共線性の問題を考慮し、ステップワイズ法を用いて各変数の標準偏回帰係数（ β ）より有意な変数を確認した。

6. 倫理的配慮

本研究は所属施設の研究倫理委員会の承認を得た後（24愛県大管理 第1-36号）、A市の児童課および対象施設となる保育園の園長に承諾を得た。対象者には、研究の主旨、方法、参加の自由、匿名性の保持と守秘義務の遵守、調査結果は研究目的以外には使用しないことを文書で説明し、回答者により厳封された調査票の回収箱への投函をもって同意を得たとみなすことを文書内に明記した。

7. 用語の操作的定義

本研究における用語について、以下のように操作的に定義する。

急病：インフルエンザなどの学校伝染病および37.5℃以上の発熱を伴う感染症、体調不良、慢性疾患の発作などのために、通常の保育園生活が不可能と判断される急性の健康上の問題。

母親の多重役割：仕事と家庭の両方の役割に従事すること⁸⁾。

認知的評価：人間と環境との間の特定の相互作用または一連の相互作用が、なぜ、そしてどの程度ストレスフルであるかを決定する評価的な過程¹¹⁾。

スピルオーバー：仕事役割と家庭役割の関係性に関するモデルの一つであり、一方の役割における状況や経験が、他方の役割における状況や経験に影響を及ぼすこと^{10,14)}。

Ⅲ. 結 果

1. 調査対象者の概要

保育園13施設での配布数の総計は1,489名であり、回収数954名（回収率64.1%）、有効回答数835名（有効回答率87.5%）であった。対象者の基本属性を表1に示す。仕事に対する満足度については、大変満足20名（2%）、どちらかといえば満足67名（8%）、どちらともいえない242名（30%）、どちらかといえば不満足393名（48%）、不満足98名（12%）であった。感染症による過去1年間の欠席日数は、平均9.0日（SD 9.98）であった。

2. 仕事役割と家庭役割間のスピルオーバー

スピルオーバー平均値を表2に示す。内的整合性を確認するため、下位尺度ごとのCronbach's α 係数を算出し、本対象者での信頼性が確認された。

3. 子どもの急病時における母親の認知的評価

認知的評価の平均値を表3に示す。

4. 病気に対する備え

病気に対する備えおよびソーシャル・サポートに関する得点の平均値を表4に示す。

5. 子どもの急病時における母親の認知的評価に関連する要因

重回帰分析の結果を表5に示す。「コミットメント」を従属変数とした分析では、「日頃の体調管理」、「病気に対する備え」、「小児救急電話相談の認知と利用」、「夫の情緒的サポート」が有意な変数として抽出され、同様に「影響性の評価」では、「職場理解」、「病気に対する備え」、「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー」が有意な変数であった。一方、「脅威性の評価」では、「職場理解」、「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー」、「両役割間のポジティブ・スピルオーバー」、「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー」、「育児相談者」であり、「コントロール可能性」では、「両役割間のポジティブ・スピルオーバー」、「病気に対する備え」、「代理保育者」、「仕事満足度」、「職場理解」、「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー」が有意な変数であった。

Ⅳ. 考 察

スピルオーバーという概念を用いて、認知低評価に及ぼす影響について分析した結果、いくつかの関連が明らかになった。職場と家庭という母親にとって主たる生活領域での役割が、もう片方の役割に及ぼす心理的な影響について以下に考察する。重回帰分析では、認知的評価の下位尺度である「脅威性の評価」に対し

表1 対象の概要

		n	%			n	%
母親の年齢	～30歳	95	11.5	勤務形態	常勤	340	41.1
	31～35歳	288	34.4		パート	385	46.6
	36～40歳	325	38.9		自営業	53	6.4
	41歳以上	125	15.0		内職	28	3.3
	無回答	2	0.1		その他	21	2.5
子どもの数	1人	228	27.3	勤務時間／週	無回答	5	1.1
	2人	405	48.4		～20	166	19.9
	3人以上	193	23.1		21～30	101	32.1
在籍クラス	乳児組（0～3歳）	347	41.5	残業時間／月	41～	42	5.0
	幼児組（4～6歳）	479	57.3		無回答	35	4.2
	無回答	9	0.2		0	214	25.6
出生順位	第1子	447	53.6	代理保育者	1～10	163	19.7
	第1子以外	373	44.7		11～20	30	3.6
	無回答	6	7.0		21～	31	3.7
最終学歴	高等学校	251	30.0		無回答	297	47.4
	短期大学	216	25.8		あり	623	74.7
	4年制大学	212	25.4		なし	211	25.3
	無回答	8	0.1				

表2 スピルオーバー平均値

	仕事—家庭 ネガティブ SP	家庭—仕事 ネガティブ SP	両役割間 ポジティブ SP
平均値	2.73	2.36	3.22
標準偏差 (SD)	0.92	0.69	0.77
α 係数	.85	.72	.82

表3 仕事と家庭を両立するうえでの困難に関する認知的評価

	コミット メント	影響性の 評価	脅威性の 評価	コントロール 可能性
平均値	4.72	3.79	1.60	3.33
標準偏差 (SD)	1.20	1.51	1.52	1.29

表4 病気に対する備えおよびソーシャル・サポート

	入園前からの 備え	日頃の 体調管理	電話相談	職場理解	情緒的 サポート
平均値	3.06	3.46	2.31	2.33	3.52
標準偏差 (SD)	0.87	0.65	0.93	1.20	1.20

て、スピルオーバー下位尺度のいずれもが有意な説明変数であった。スピルオーバーの中で最も影響力が大きかったのが「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー」および「両役割間のポジティブ・スピルオーバー」であり、次いで「仕事から家庭へのネガティブ・

スピルオーバー」であった。「コントロール可能性」については、「両役割間のポジティブ・スピルオーバー」が強い影響力を持つ変数であり、次いで「仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー」であった。つまり、家庭または仕事いずれかの役割過重から「ネガティブ・スピルオーバー」の高い状況に置かれている母親は、脅威性の高い認知的評価を下す傾向にあり、コントロール可能性の低い状態にあるといえる。一方、そのような状況下にあっても、仕事と家庭どちらかの役割で生じた状況や意識が、もう一方の役割にポジティブな影響を与えていれば、子どもの急病に直面しても、コントロール可能な出来事だと認知し落ち着いて行動できる可能性が高くなる。以上のことから、認知的評価における脅威性の軽減ならびにコントロール可能性の保持には、「ネガティブ・スピルオーバー」の低減のみならず、「両役割間のポジティブ・スピルオーバー」を向上させることが有効であるといえる。今後は、これらスピルオーバーに影響する要因についても検討が必要と考えられる。

次に、仕事をもつ母親の子どもの急病時における認知的評価に影響するスピルオーバー以外の要因につい

表5 認知的評価に影響する要因に関する重回帰分析

		コミットメント	影響性の評価	脅威性の評価	コントロール可能性
		β	β	β	β
対象の概要	最終学歴		.07		
	仕事満足度				-.08 *
	出生順位				.05
	欠席日数	-.07			
備え	体調管理	.15 ***	.08		
	病気に対する備え	.13 **	.14 **		.13 ***
	電話相談	.12 **			
サポート	職場理解		-.14 ***	-.18 ***	.08 *
	育児相談者			-.09 **	
	代理保育者				.09 **
	夫の情緒的サポート	.11 **		-.07	.05
スピルオーバー	仕事—家庭 ネガティブ・スピルオーバー			.11 **	-.08 *
	家庭—仕事 ネガティブ・スピルオーバー		.11 **	.13 ***	
	両役割間 ポジティブ・スピルオーバー			-.13 ***	.30 ***
重相関係数 R		.34	.29	.41	.39
R ²		.11	.08	.16	.15
調整済み R ²		.10	.08	.16	.14
F 値		14.90	10.07	23.73	16.81
有意確率 p		.000	.000	.000	.000

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

て考察する。認知的評価には個人の性格特性をはじめ、ストレスを生起させる個人的要因の関与が予測されているが¹⁵⁾、それ以外の変数によって行った今回の重回帰分析では、投入した独立変数による説明率は低い結果となった。また、鈴木らは、ストレスマネジメントにおいて、ストレス状況下での脅威性を軽減し、コントロール可能性を向上させることの重要性を指摘している¹²⁾。今回の調査では、「脅威性の評価」に最も関連する要因と考えられるのは「職場理解」であり、これに続く「育児相談者」についても「脅威性の評価」に関連すると考えられた要因はいずれもソーシャル・サポートであった。また、「コントロール可能性」に対する最大の関連要因は「病気に対する備え」であり、「代理保育者」、「職場理解」、「仕事満足度」がこれに続いた。「職場理解」については、「脅威性の評価」および「コントロール可能性」のいずれにも関連する要因と考えられ、幼い子どもを抱えて就労する母親にとって、職場理解などのソーシャル・サポートが認知に及ぼす影響はきわめて大きいといえる。また、「代理保育者」の存在については、子どもの急病時に保育園へのお迎えや世話を依頼できる人がいると、対処行動の予測性が高まることから、コントロール可能な状態になりやすいといえる。

子どもの急病は突発的な事態であり、脅威となり得るストレスには違いないが、このような事態を日頃から予測しておくことによって、コントロール可能性の向上が期待できる。稲葉は、有配偶女性の就労とメンタルヘルスについて調査し、6歳以下の子どもを抱えて常勤で仕事をしている女性のほとんどが、いざという時に子どもを預けることのできる親族を保有しており、こうした親族のいない人はきわめて高いディストレスを経験し、多くが常勤での就労を断念していると指摘している¹⁶⁾。本研究でも、母親の約75%が代理保育者を有しており、仕事継続に対する親族のサポートの影響は大きいと考える。すなわち、子どもを保育園に預けて働いている母親は、祖父母などのサポートの恩恵を受けているからこそ仕事が継続できている母親といえなくもない。もっとも、ソーシャル・サポートが得られたとしても、受け手である母親がネガティブな認知的評価をする場合には、それが有効に利用されないとの報告もあり¹⁷⁾、サポートを動員するには、それを享受する力が必要になる。これは、対処能力の一つであると考えられ、子育てをしていくうえ

での強みとなるものである。子どもの急病は避けて通れないものと認知し、母親として成長していくために、ソーシャル・サポートの有益性が理解されるような働きかけなど、サポート希求力を考慮に入れた研究についても今後の課題としたい。今回は、支援を得られず仕事継続を断念した母親の意見は得られておらず、今回の結果が仕事をもつ母親全体の認知的評価の指標となる汎用性の高いものとはいえない。今後は、このような母親を対象に含めることによって、認知的評価に対する関連要因の分析をさらに深めることが課題である。

認知的評価には個人の性格特性をはじめ、ストレスを生起させる個人的要因が大きく関与することが当初から予測された¹⁵⁾。しかし、役割過重の改善や家族機能の向上など、家族看護の視点から介入が可能と考えられる要因を優先し、今回の調査では個人特性の測定は見合わせた。そのうえで今回、本研究で独立変数として採用した母親を取り巻く環境因子が認知的評価に関連することが示された。先行研究から、育児の経験や知識が行動認識の獲得につながるということが明らかにされており、本研究でも母親の環境要因が認知的評価に関連することが示されたことから、病気に対する備えとして子どもの急病に対する知識の提供や、急病時のソーシャル・サポートの充実など、母親の環境因子に働きかけることによって、認知的評価にある程度の変化をもたらす可能性を示すことができたものとする。

V. 結 論

家庭または仕事いずれかの役割過重から「ネガティブ・スピルオーバー」の高い状況に置かれている母親は、子どもの急病時に脅威性の高い認知的評価を下す傾向にあり、スピルオーバーの視座に立てば、「ネガティブ・スピルオーバー」の低減のみならず、「両役割間ポジティブ・スピルオーバー」を向上させることが有効である。認知的評価については、仕事をもつ母親が遭遇する子どもの急病というストレス状況下において、ストレスマネジメントに関わる「脅威性の評価」に対して「職場理解」、「育児相談者」、「スピルオーバー」が関連し、「コントロール可能性」に対して「病気に対する備え」、「代理保育者」、「両役割間ポジティブ・スピルオーバー」といった母親の背景要因が関連することが明らかになった。

謝 辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力くださいましたお母様方をはじめ、調査にご快諾頂きました A 市児童課責任者様、保育園の関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

本研究の要旨は、第61回日本小児保健協会学術集会（福島）にて発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 総務省. 平成23年度社会生活基本調査. <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou2.pdf> (2013年12月26日)
- 2) 藤本美由紀, 木戸久美子, 伊東美佐江. 子育てと仕事の両立に影響する要因：子育て期に就業経験のある女性への面接データ分析から. 母性衛生 2011;4:704-710.
- 3) 武市知己, 小野美樹, 小倉英郎, 他. 少子化対策に求められるものは何か？—育児協力や母親の就労状況, 育児困難についての質問紙調査—. 小児保健研究 2005;64(4):542-551.
- 4) 内閣府男女共同参画局推進課. 再チャレンジ事例報告書. 2009:1-30.
- 5) 野原理子, 加藤郁子. 保育園での追跡調査および保護者へのアンケート調査による男女労働者に対する育児支援策の検討. 東京女子医科大学雑誌 2011;6:408-415.
- 6) 谷原政江, 阿部裕美, 森 照子, 他. 子どもが病気をした時の保護者の対応と病児保育支援ニーズ. 川崎医療福祉学会誌 2010;2:411-418.
- 7) 長谷川 望, 大野京子, 斎藤義弘, 他. 集団保育児の体調不良時の家庭での対応とその支援策について. 小児保健研究 2007;66(6):809-814.
- 8) 福丸由佳. 乳幼児を持つ父母における仕事と家庭の多重役割. 風間書房, 2003.
- 9) 小泉智恵, 菅原ますみ, 前川 暁子, 他. 働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響. 発達心理学研究 2003;3:272-283.
- 10) 福丸由佳. 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連. 家族心理学研究 2000;2:151-162.
- 11) Lazarus Richard S, Folkman Susan. 1984. 本明 寛, 春木 豊, 織田正美. ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究. 実務教育出版, 1991.
- 12) 鈴木伸一, 坂野雄二. 認知的評価測定尺度 (CARS) 作成の試み. ヒューマンサイエンスリサーチ (早稲田大学大学院人間科学研究科紀要) 1998;7:113-124.
- 13) 渡部誠一, 中澤 誠, 衛藤義勝, 他. 小児救急外来受診における患者家族のニーズ. 日本小児科学会雑誌 2006;110(5):696-702.
- 14) Crouter AC. Spillover from Family to Work: The Neglected Side of the Work-Family Interface. Human Relations 1984;37:425-442.
- 15) 岡安孝弘. 大学生のストレスに影響を及ぼす性格特性とストレス状況との相互作用. 日本健康心理学会 1992;5(2):12-23.
- 16) 稲葉昭英. 仕事と家庭の葛藤と調整. 石原邦雄. 家族のストレスとサポート. 放送大学教育振興会, 2004:206-224.
- 17) 堀部めぐみ, 小山田隆明. 母親の育児ストレスに関する研究. 岐阜女子大学紀要 2011;40:145-156.

[Summary]

The purpose of this research was to examine a connection “spillover” which indicates a multiple role relationship, “social support”, and “preparation for children’s sudden illnesses” with the cognitive appraisal of working mothers regarding their children’s sudden illnesses. A questionnaire survey was conducted for working mothers of their nursery school pupils. As a result of a multi-regression analysis which made each 4 subscale score of the cognitive appraisal a dependent variable, “Workplace understanding”, “negative spillover from work to family” and “positive spillover between the two roles” were confirmed as significant variables in the “value of the threat” score, and the “control possibility” score in regard to stress management. This study suggested the possibility that intervention in the environmental parameters of working mothers brings about a change in their recognition at the time of the sudden illness of their children.

[Key words]

cognitive appraisal, spillover, social support, working mothers, children’s sudden illnesses